

二月十七日

實甫即ち久坂元瑞は左の書を松陰に致した。

英雄ノ蠢愚ヲ待ツヤ喜怒常ナラズ、抑揚迭ニ生ズ。固ヨリ術數ヲ以テセザルヲ得ズト雖、然レトモ丈夫ニシテ相知ルハ、當サニ光風霽月ノ如クナルベシ。何ゾ必シモ秘策深計、夫ノ蠢愚者ヲ待ツガ如クセンヤ。

松陰實甫に復して云ふこと左の如し。

吾ハ英雄ニ非ズ安ソノ術數有ラン。一言モ意合ヘハ許スニ知己ヲ以テシ、一事モ違忤セバ立ドコロニ罵詈ヲ加フ。罵詈一タビ過クレハ亦復舊ノ如シ。吾ノ同志ノ志ヲ待ツヤ藩籬ヲ撤シ荆棘ヲ除ク。自ラ信スルコト此ノ如シ。公若シ不平有ラハ一々罵詈セヨ一々復答セン。若シ大過有ラバ改悔ニ吝ナラザルナリ。抑吾公等ニ不平アル何ソ其レ極ミ有ラン。然レドモ人ヲ罵ルハ易シ。而シテ詈ヲ受クルハ難シ。吾其ノ易キヲ先ニシテ其ノ難キヲ後ニス。寅白ス。

第二章 松陰の再入獄後の榮太郎

松陰實補と往復

九九

第二章 松陰の再入獄後の榮太郎

松陰實補と往復

一〇〇

同 二十三日

實甫又松陰に左の書を致す。

松洞ノ歸ルヤ、先生大イニ唾罵ヲ加ヘラル。今ヤ其ノ反正ヲ悦フノ詩ヲ作り、曩ニハ無逸ノ心死ヲ哭シ又之ヲ稱スルニ清正等ノ事ヲ以テセラル。其ノ人才ヲ駕馭スルノ術巧ト謂フ可シ。然リト雖術ノ巧ナル者ハ、人却テ疑ヲ容ル。故ニ曰ク巧詐ハ拙誠ニ若カズト。僕等ヲ遇セラルルハ宜シク其ノ誠ニシテ巧ナラサル者ヲ以テセラルヘシ。至願至願

松陰之に復して云ふ

無逸ノ卓識實行ハ淺人ノ窺知スル所ニ非ズ。而シテ僕遽ニ心死ヲ以テ之ヲ哭ス。僕深クコレヲ悔ユ。松洞時ヲ待ツヲ以テ僕ニ望ム。僕唾罵セズシテ何ヲ以テカ飽悶ヲ散センヤ。飽悶一タヒ散シ又其ノ反正ヲ聞キテハ喜ハサラント欲スルモ得ンヤ。僕同志ヲ待ツニ兄弟ヲ以テス。象喜ンテ舜喜ブ、痛痒相關スルコト正ニ方サニ此ノ如

内容見本

(65%縮小)

シ。足下猶以テ詐僞ト爲サバ必スヤ怒ヲ藏シ怨ヲ宿シ然ル後ニ眞實ト爲サン耳。噫、是レ丘明ノ耻ツル所ナリ。實ハ則チ爲ササルナリ。

師も思ふ所を以て弟子に告げ弟子も亦師の言動の解し難き所は遠慮氣兼ねく之を師に質す。師弟真情の交通此くの如くにして始めて望む可し斯る場合に打明けて語らざりせば師は師の言ふ所を以て術數巧詐と速了し遂に相信せざるに至らん松門教育の師弟間眞に兄弟朋友の如く阻隔なきこと此の邊にても分るなり。

猶松陰の無逸を知るの深きことは實甫等の窺測し得ざる所なるべし。或は清正に比し或は自ら及はずと云へるが如きも亦眞心を語れるものにして決して失當の言にはあらずらん。師たる松陰が此くの如くに眞情を吐くも無逸が一言せざりしは惟むべきが如きも此の所無逸の才の尋常ならず又頰の頰たる所であらう。

第二章 松陰の再入獄後の榮太郎

松陰實補と往復

一〇一



復刻版の装幀です(デザイン・毛利一枝)

限定四百部復刻

真摯な生き方とユニークな活動で
同時代人を心酔させた、
松陰最愛、謎多き志士の生涯

松陰先生と吉田稔磨

増補版

題字 毛利元昭

来栖守衛 [著]

マツノ書店

賛は松陰・月の絵は松洞・無逸の東行を送る



異色の志士・吉田稔磨の魅力

佛敎大学非常勤講師 町田 明広

最初に稔磨と出会ったのは、今から四十年近くも昔の小学校五年生の時である。司馬遼太郎の「龍馬がゆく」を初めて読んで、その時から幕末の魅力に取り憑かれている。中でも、稔磨の印象が極めて鮮烈であった。

池田屋事変の描写の際に、尊王志士・稔磨は凛とした清々しくもある態度で新選組を迎え撃ち、しかも、回避できたにもかかわらず、非業の死を遂げてしまった。余りに惜しい。その時のインパクトが、継続している。

そもそも稔磨は、吉田松陰の最愛の弟子であり、久坂玄瑞や高杉晋作といった錚々たるメンバーに連なり、極めて異色な経歴を持った志士であった。しかも、龍馬にも通じる、あまりに痛恨の最期である。後世の多くの人たちを魅了するのは、至極当然かもしれない。

その後、卒業論文に稔磨を選んだ。そのユニークな事績を検証し、いかに幕末史に重要な人物かを論じたつもりである。その際に、最もお世話になったのが、今回再復刻される『松陰先生と吉田稔磨』であった。本書はまさに、稀有な稔磨伝である。

ところで、卒論のために史料を獵歩している時に、その劇的な死についての疑問が湧き上がった。そして史実を覆す、池田屋に稔磨がいなかったという新事実に突き当たった。震えるような感覚の中で、その真実に特化した論文を執筆して世に問うたが、思いの外に反響が大きく、改めて稔磨の人氣を痛感したものだ。

さて、今回、珠玉の復刻に拙稿を掲載いただけの僥倖を得た。初出から時間が経っているため、一部手直しを施している。それにしても、稔磨との縁に深い感慨を覚える。いつか忘れていた夢がある。平成の「稔磨伝」である。機会があれば、挑戦してみたいものである。



吉田稔磨と明治維新史研究

広島大学大学院教授 三宅 紹宣

吉田稔磨については、その真摯な生き方に心ひかれるものがあり、古くから愛着のある人物である。とりわけ吉田松陰との師弟交流が好きである。安政四年、稔磨が江戸に出発するにあたり、松陰は上張地を贈っている。その文に、「贈り物は粗末であるが、心をこめているところは粗末ではない」とあり、質素だが心のこもった交流がうかがえる。虚礼に流れるつきあいは距離を取りたい気分のある自分にとって、まさに理想である。

さらに、稔磨は、明治維新史研究を進展させる上で重要な意義を持つている。最近、攘夷論について否定的論調が広まってきている。攘夷は、世界の大勢を知らない無謀な主張であり、それに対し、幕府は合理的、理性的に対応し、これにより独立が保てたとする見方である。しかし、この説明では、なぜ志士達が困難な状況にもかかわらず立ち上がり、近代国家を作ったのか説明できない。よって、追求しなければならぬ研究課題は、志士達の政治思想を具体的に明らかにしていくことである。

稔磨の政治思想を分析すると、松陰のもとで、世界情勢を熱心に勉強しているのが印象的である。そして攘夷が困難であることも充分承知している。にもかかわらず、独立を保つためには、西洋列強に抵抗する姿勢を打ち立てるしかないとする。そして困難を克服した事例として、アメリカ独立戦争があると、それを理想としているのである。

この考えかたは、久坂玄瑞、伊藤博文、長州藩で活動した中岡慎太郎などにも見られるものであり、その源は松陰にある。松陰からの流れを分析したのが「幕末志士達のアメリカ独立戦争認識」である。中でも最も鮮明な事例は稔磨である。稔磨についての関心がさらに高まり、研究が深まることによって、明治維新史研究がより発展することを祈りたい。

奸人の勢一旦はつよし、されども月日を送るうちには、自ら怠たる也、怠たれば離る、離れば争ふ人情也
御国は猛虎の深山によるの勢をなし、徒然動くべからず、只今いかやうなる強き辞を以てわれを犯し候とも恐るべからず、只人心沸騰を鎮静し、他事に暇あらずとて月日を送るなり

その内訖と紀律を嚴重にし、驕惰凌上の病をふせき、朝氣をたくはへ、節儉の風をおこし、他日の用を蓄はへ、機会次第堂々旗幟を上国にたつべし、其時者已前之振とちかひ、一層嚴ならざるべからず、其上費用亦格外なるべし、御国確乎と勇立一言半行たりとも軽くすべからず、彼円形の備への欄入すへき所なきがごとくなり、屈せず撓まず怠らず驕らず苟もせず侮らず懼れずして、終に内修外攘の大功を奏し玉はずあるべからず(栗栖三三三―四頁)

このように稔磨は、幕府老中の事なかれ主義を厳しく批判し、一藩割拠論を先駆的に構想し、それにより国内を治め、攘夷実行を提起している。

5 吉田稔磨の政治思想

一八六四年(元治元年)三月二日、稔磨は江戸を発し、三月七日夜京都に着いた。(元治元年三月一〇日付、平野清八宛吉田稔磨書簡、「年度別書翰集」)

京都で稔磨は、長州藩の急進派の鎮静工作に奔走した。妻木へは「滞府之節被仰聞候板閣印(板倉勝静)鎮静二御同意之趣モ、先日国元親友迄申遣候」と書いて、鎮静に望みをかけている。(元治元年三月三〇日付、妻木田宮宛吉田稔磨書簡、「年度別書翰集」)

四月四日、稔磨は、京都藩邸内願就院に安置の毛利元就などの霊牌を護し、京都を出発した。四月一日、山口に帰った。
四月二〇日、藩庁は、御内用のため稔磨を江戸に遣わすこととして三所物を賜い、贈遣の用に供せしめた。二四日、御納戸に対し三所物を払いきりにするよう沙汰があった。³¹⁾稔磨の江戸行きは、藩庁の指令であったことが確認できる。³²⁾

五月初旬、稔磨は京都へ着いた。木戸は、「先日吉田稔磨持登候幕府之御願書両通」(元治元年五月五日付、政事堂宛木戸孝允書簡、「木戸孝允文書」二、一一頁)と、稔磨の持参した幕府への願書提出を模索した。その上で、「吉田年丸も探索且周旋尽力之為東上と一決」(元治元年五月一日付、宍戸九郎兵衛宛木戸孝允書簡、「年度別書翰集」)と、稔磨は江戸行き計画であった。しかし、その後、京都滞在の方針に変更となった。

五月一日、稔磨は、妻木田宮へ長文の書簡を認めた。これは、元治元年五月四日付の妻木からの書簡への返書として認めたものである。³³⁾これまで未紹介の重要な書簡なのでほぼ全文を紹介しよう。



吉田栄太郎(稔麿)の魅力

萩博物館特別学芸員 一坂 太郎

吉田栄太郎は歴史の教科書はおろか、山口県のお国自慢にもあまり登場しない「幕末の志士」だが、以前から若い女性の歴史ファンの間では、ちょっとした人気者らしい。その理由は大きく分けると次の二点だと、私は思う。

一点目は、栄太郎の経歴が他に類を見ないほど波瀾万丈で、面白いこと。萩・松本村の貧しい下級武士の家に生まれた栄太郎は、江戸で黒船騒動を体験した後、松下村塾で吉田松陰に師事。松陰から無逸の字を贈られ、かわいがられた。後世、高杉晋作・久坂玄瑞・入江九一と共に「松門四天王」のひとりに数えられる。

万延元年(一八六〇)には脱藩して諸国を巡った後、江戸に出て幕臣妻木田宮に仕えた。幕府内部で「勤王」を説こうと考えたからという。しかし、文久二年(一八六二)、許されて長州藩に復帰。翌三年、屠勇取立を建白し、外国艦を砲撃して、奇兵隊にも参加。過激派が幕府使節を暗殺した朝陽丸事件を解決するなど、その特異な人脈を駆使して幕府・長州藩間の調停にも奔走した。

だが、元治元年(一八六四)六月五日、京都三条の池田屋事変で新選組と戦い、負傷して自害した。享年二十四。同年七月十九日、「禁門の変」で長州藩は敗れ、孝明天皇から朝敵の烙印を押されることになる。

若くして亡くなったにもかかわらず、栄太郎には本人が書いた文書類や周囲の関係史料などが、意外なほど多く残されている。中でも各地から故郷の両親にあてた手紙は、栄太郎の人柄を伝えて余りある。

たとえば、私が面白いと思うのが文久二年(一八六二)三月十五日付、母あての手紙。名代となり地方へ出向いた栄太郎は、代官や庄屋、村役人も自分の思いどおりに動いたと喜ぶ。その時の様子を、「道々百姓どもかがみ、村役人も名主も二の間よりきげん(機嫌)をうかがひに参り、実はきうくつ(窮屈)にこれあり候えども、かやうあい成り候こそ武士の本意にごさ候。およろこび下され候」と、得意絶頂の面持ちで知らせる。優れた資質を持ちながらも、下級武士ゆえのコンプレックスを抱き続けていたことが、垣間見える。

あるいは、栄達を遂げた栄太郎が、そのことを母に知らせた文久三年七月六日付の手紙には、「まず一番に吉田(松陰)先生に御みき(神酒)・御さかな御あげ成され候」とあり、松陰に対する並々ならぬ思いが吐露されている。もっとも、この時の出世は松陰に師事したことが直接の理由だから、なおさらだったのだろう。

また同じ手紙で「吉田栄太郎」という同姓同名人がいるため、名を変えるとも知らせる。さらに七月七日付、両親あてにの手紙では、椿八幡宮の神主青山上総助に依頼して「年磨」の名をもらったとも言っている。これにより「吉田稔麿」という、いささか個性的な名前に至った事情が分かる。

このように人物像がリアルにうかがい知れるのが、人気要因の二点目だと思う。マイナーで、あまり手垢が付いていないというのも、新鮮でいいのだろう。

さて、その手紙類の大半はこのたびマツノ書店から再度復刻される、来栖守衛『松陰先生と吉田稔麿』に収められており、読むことが出来る。昭和十三年(一九三八)、山口県教育会から初版が出た、栄太郎こと稔麿唯一の評伝だ。

著者の来栖は当時七十六歳で、教育畑を歩んだ人。「先生(松陰)と門生一人との関係に於て精細に尋究することの最益多かるべきことを思ひ、予は先づ先生最愛の門生にして、松門四天王の一と称せらる、才性秀抜、其行動特に変化曲折多くして且未だ其の詳伝を見ざる吉田稔麿」を選んだと述べる。

私は現在、本書の骨子のひとつである「吉田家保存文書」の翻刻編纂に取り組んでいる。雑務に追われ、遅々として進まぬが、いずれ出版したいと考えている。現存する史料を本書と比較すると、たとえば父・母または両親あての手紙は合計二十七通あるのだが、うち全文が活字になっているのは十六通で、残りは抄録、要約、省略となっている。

そうした問題は残しつつも、本書が吉田栄太郎の実像を史料から読み解く、最高のテキストであることには異論がない。幕末の動乱に身を投じた、一人の若き草莽の息吹が伝わる好著である。